
ピータバロ

風梨凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピータバロ

【Nコード】

N1868E

【作者名】

風梨凜

【あらすじ】

ピータバロ、それはイギリスの小都市の名前。17歳の誕生日をま近にした、売れない画家のキース・L・ヴァンベルトの前に突然現れた、可愛いがおそろしく小生意気な小学生の女の子。「この絵いいわね。私を買ったげる」彼女がキースに支払った金額は何と250ポンド（約5万8千円）貰いすぎたお金を返すため、キースは彼女を追って、名門校ピータバロ・シティ・アカデミアに潜入するのだが…

ロンドンから鉄道にのって北に約一時間。

小都市、ピーターバロ。

近代的な建物にあおりを受けることもなく、この都市にはまだ古い町並みが残されていて、ゴシック様式の大聖堂と、美術館。そして、それに続く小道には、点々と無名画家たちの露店が立ち並んでいる。

ピーターバロ市がある地方の秋は短く、艶やかな紅葉が街を彩る期間はわずかで、じきにやってくる冬を予感させる灰色の空に、ナナカマドの実だけが赤く目に映る。

その露店の一つで - キース・L・ヴァンベルト - は、冴えない顔つきで小麦色の髪をかきあげ、恨めしげに通り過ぎてゆく人々に目をやった。

いつかあの豪勢な美術館に、自分の絵が飾れたら。そんな思いで田舎を飛び出し、この町にやって来たまではよかったけど……、

今日も、1枚の絵だって売れやしない。こんなんじゃ、絵具代どころか飯代だって危ういぞ。そういえば、昨日、食った飯は何だった？ 売れ残りまぎわの食パンか？

「お前にもろくなもん、食わしてやってないな」

キースは、彼のそばに寝転んでいる彼の相棒 - 雑種犬 - の毛並みをくしゃくしゃとなぜた。中型だが、茶色と白の模様はなかなかいいコントラストをしている。それに垂れ下がった茶色の大きな耳が、けっこう可愛い。

「明日は俺の17回目の誕生日なのに、こんなんじゃ、ケーキの一片も食べれやしない」

すると……、

小道の向こうから黒髪をなびかせて歩いてくる少女が目に入ってきた。この辺りじゃあまり見かけない南洋風と西洋風が混ざり合ったようなエキゾチックな顔立ち。それにも増して、目を引くには、えんじ色のブレザーに白いリボン。胸には鳥のつぐみをデザインしたエンブレム。それは、このあたりでも裕福な名家の子息、令嬢が通う寄宿舎制の学舎、ピーターバロ・シティ・アカデミアの制服に間違いなかった。

今にも鳴り出しそうなすきつ腹をかかえた青年に、ふと気がつく
と、少女は小生意気な目を瞬かせて、露店に近づいてきた。

1枚の風景画を指差し言う。

「これ、いい絵じゃないの。描いたのはあなた？」

アイドル並みの可愛さで笑顔を作る。けれども、態度は傲慢だ。

「この店に並べた絵はみんな、俺の描いたもんだよ」

少々、むっとした声で答えた若い露店主に、

「夜のカフェテリア、この店を照らした街灯の黄色が暖かくていい感じ。季節は5月。どう、当たっているでしょう？」

「へえ……よくわかるな。お前、まだ小学生くらいなのに、意外と見る目があるじゃないか」

「あなたの隣にいるその犬の名前だってわかるわよ」

「こいつの？」

「ええ、その毛並みとずんぐりした体型、名前はパトラッシュ！」

キースはその答えに天を仰いだ。

フランダーズの犬かよ！？ 俺はまだ、そこまで貧しくねえよ。

そして、これが、この青年 - キース・L・ヴァンベルト - が、
絵画窃盗団“ピーターバロ・シティ・アカデミア”にかかわる第一

歩だっただの。

* *

大聖堂の鐘楼から、午後4時を告げる鐘の音が響いてきた。その音と同時に少女のポケットで携帯電話の呼び出し音が鳴った。

「あ、忘れてたわ。4時までには学校に戻らないといけなかったのよ」その割には、少女はあせって携帯に出るでもなく、それをぶつんと切ると、まだ、露店の絵をあれやこれやと物色している。

「お前、あの金持ち学校のお嬢様なんだろ。呼び出されてんのに、こんな薄汚い露店で道草なんか食ってたら、先生に叱られるぞ」

場違いな奴は、とつと何処かへ行つちまえ！

苦々しい気持ちを抑えるように油壺に絵筆をつつこみ、キースはそれをじゃばじゃばと洗い出した。……と、その時また、少女が声をかけてきた。最初に見かけた風景画を指差して言う。

「でも、これって本当にあなたが描いたの？」

「この店に並べた絵はみんな、俺の描いたもん。さっき、そう言ったの、聞いてなかったのかよ」

視線をきりとぶしつけな客に向ける。すると、少女は一瞬、どきんと目を瞬かせた。その若手画家の琥珀色の瞳が、やけに綺麗に思えてしまったからだ。

「そ、そんなに睨まないでよ。この絵、私が買ったげるから。……で、いくらで売ってくれるの？」

「……買ったげるって、ふざけんなよ。いくら俺だって、小学生の小遣い程度じゃ大事な絵は売らないんだぞ」

ふうんと少女は少し考え込むようにして、ポケットから花模様の財布を取り出した。いかにも少女趣味なデザインのそれから、こそこそと“お小遣い”を引っ張り出して言う。

「これで手を打ってよ」

「えっ、ちょ、ちょっと待ってくれよっ！」

けれども、キースの手に代金を握らすと、少女は目にも止まらぬ早さで風景画を抱え込み、学校の方へ走り去ってしまった。

ひい、ふう、みい……えっ？ 50ポンド紙幣が5枚？！ って250ポンド！！

（＊注、250ポンドは約3万7千円（変動ありですが……））
「おいっ、待てよ！ ガキからこんなにもらったら、俺が先生に怒られるだろっ！！」

だが、少女の姿はすでに街路樹の向こうに消え去った後だった。

何て子供だ……お金の値打ちが分かってんのか？ 俺の絵にぼんと250ポンド？

“この絵って、いい絵よね”

それでも、少女のその台詞は妙に自信に満ちていて、キースはまんざらでもない気分だった。

駄目駄目っ！ きっと、後からあいつの学校の先生がやってきて、うちの生徒をカツアゲしたとか何とか言われるに決まってるんだ。早めに返しておいた方が身のためだぞ。

“絶対、その方がいい”と、大急ぎで店を片付け、キースはそばにまどろんでいた雑種犬に目を向けた。

そういえば、こいつの名前……まだ、決めていない。ああ、もうこの際、何でもいいか！
「一人は何だか不安なんだ。お前も一緒に来てくれ！……パトラッシュュー！」

そして、キースはパトラッシュを連れて、少女の学校、“ピーターバロ・シティ・アカデミア”へ大急ぎで駆けていった。

* * *

“ピーターバロ・シティ・アカデミア”

12世紀に建築されたピーターバロ大聖堂と同じ、初期イギリス・ゴシック様式を用いた繊細な彫刻をほどこした正門の石柱。建物の正面であるファサードの上には煌びやかなステンドグラスがはめ込まれている。

「本当に、ム力つく建物だよなっ」

学校というより聖堂といった風の校門の前で、キースはちえつと舌を鳴らした。

髪はバサバサ、油絵具で汚れた上着に破れたGパン。どう見たって、自分はこんな場所にはそぐわない。

あの女の子を追いかけて、来ちまったけど……もらった絵の代金が多すぎたから返します。なんて言ったら、ますます怪しい奴だと思われないか？ それでなくなつて、近頃のロンドンじゃ、物騒な事件が続いてるっていうのに。キースは眉をしかめた。

そうなのだ。ここどころ、首都ロンドンでは、小さいのから大きいのもで色々な事件が多発している。特に、今、新聞紙上を騒がしている連続殺人事件。さすがに郊外のピーターバロ市にまでは、その被害の噂は聞こえていないが、今、おかしい事をしでかしたら、彼らみたいな露天商は、即、挙動不審者として警察に引っ張られてしまいそうだった。

はあ……と、ため息をもらし、足元にいるパトラッシュに目をやる。その時だった。

「よかった！ 間に合ったのね。もう諦めてたのに！」

不意に聞こえてきた声に、キースは驚いて後ろを振り返った。

キャメルのスーツを着こなした、長身のセクシー美女。歳は20代後半か。

ショートカットのブルネット。眼鏡の向こうの知的な瞳。

美女は、目前の青年をはたと見つめなおす。そして、少し気を落した風にこう言った。

「違うわね……、どう見てもその格好は、うちの美術学院の生徒とは思えないわ……で、あなた、この学校に何か用？」

どうやら、この美女はステイ・アカデミアの女教師のようなのだ。訝しげな彼女の物言いにム力つきながらも、この際だ。と、キースはポケットに突っ込んであった250ポンドを無造作に差し出した。「これ、お宅の生徒が俺の絵と引き換えに置いてったんだ。でも、俺の絵はこんな高値で売るような絵じゃないんだよ。あんだ、この先生？ 金持ちのご令嬢かなんか知らないが、もつと生徒に金の値打ちをきつちりと教えた方がいいんじゃないのか」

「あなたの絵を？ うちの生徒が？」

一寸、間をおいてから、その美女はふつと意味深な笑みを浮かべて言った。

「という事は、あなた、絵描きなわけ。なら、聖堂美術館に行ったことはある？ あそこの展示物には詳しい？」

“ 聖堂美術館 ”

それは、ピーターバロ大聖堂に隣接したこの都市で唯一の美術館だ。いつか、その場所に自分の絵が飾れたら……それが、キースの

夢なのだ。

「……そりゃあ、一通りの絵は全部見てまわってるけど……特に、今、特別展示されてる“神秘の降誕”はもう七度も見た」

「“神秘の降誕”！あの絵が好きなの？そう、おあつらえ向きじゃない。なら、私と一緒に来て！」

美女はそう言つと、キースの腕を引つ張つた。有無をいわず、彼を学校の門の中へ引き入れようとする。

「ち、ちよつと、待ってくれよ！俺を何処へつれてゆくんだよ！？」

あわてふためく青年をまるきり無視して、彼女は笑つた。

「頼んでいた美術学院の生徒が間に合わないみたいなの。だから、アルバイトさせてあげる」

仕事は、子供たちの絵画鑑賞ガイド。

場所は聖堂美術館。

「報酬は250ポンドでどう？」

また、250ポンドかよ！この学校って生徒も先生も一体、どうなつちまってるんだ？！

「おい、待てよっ！俺はまだYESとは言つてない！」

「なら、今、YESと言いなさい」

一旦開いた“ピーターバロ・シティ・アカデミア”の校門が、再び閉じられてゆく。校門の外に中型犬を一匹、取り残して。

すわ、相棒の一大事？！

そう思ったかどうかは微妙だが……それでも、キースの相棒、名

犬？ パトラッシュは、クンクン鼻を鳴らしながらその建物の裏手に向かつておもむろに駆け出した。

* *

結局、鑑賞ガイドとやらのアルバイトを引き受けるはめになった。
まった。

聖堂美術館の展示室の入口で、貧乏な無名画家は深くため息をついた。

“でも、その格好じゃねえ……ここにうちの美術学院の制服があるから、とりあえずそれに着替えて”

けれども、ブルネットの女教師から渡された、着替えは、“ゆるゆる”で“だぶだぶ”だ。

他のサイズはなかったのかよ！ この格好の方が前よりよっぽど、変じゃないか。

ぞろぞろと後をついてくる、お坊ちゃん、お嬢ちゃん面をした生徒たちに目を向けて、キースは半ばやけくそで、正面に展示された一枚の宗教画の説明を始めた。

「“受胎告知”……数多くの画家によって色々な作品が描かれているが、これは「マタイによる福音書」の記述を元に描かれた1枚で、天使ガブリエルが降臨し、精霊によりマリアがキリストを身ごもった事を告げる場面を描いたものだ」

すると、お坊ちゃんの一人がこう言った。

「そんな事、聞かなくても知ってるよ。ガイドならもうちょっと、気のきいた事を教えてくれないかなあ」

何て、クソ生意気な子供なんだ。

「なら、どんな説明ならお気に召すんだよっ！」

その時、じろりと睨みつけた目の先に、大きな愛くるしい瞳の黒髪少女を見つけて、

「お前っ、さっき、露店で俺の絵を買っていた女の子じゃないか？
！ いつの間に列に入ってたんだ？ さっきまではいなかったのに」

少女は、訝しげに即席の絵画ガイドを見やる。

「お兄さん、ここの学校の生徒じゃないでしょ。こんなところで何やってんのよ。貧乏が過ぎて偽装アルバイト？」

すると、先程の小生意気な坊ちゃんが口をはさんできた。

「何だ、こいつってミリーの知り合い？」

少女はその問いにぽつと、頬を赤くした。でも、それは、ほんの一瞬で、

「うっん、単なる“通りすがり”の売れない画家よ」

可愛い表情から、繰り出される辛らつな台詞。キースは呆れかえって、もう怒る気にもなれなかった。少女が抱えている白い包みを見て、彼は言う。

「お前、ミリーって名前なのか。その手に抱えている大荷物は何だ？ 美術鑑賞にそんなもん必要ないだろう？」

四角い形……絵か何かか？

「ミルドレッドよ。みんなはミリーって呼んでるけど。この荷物は……気にしない、気にしない。それより、“受胎告知”の隣にある“風景画”の説明をしてよ。この絵の方がずっと、私は気に入ってるんだから」

「“風景画”？ でも、これってたいして名もない普通の画家が描いた模写だぞ」

「いいの！ みんなも集まって！ お兄さんの説明を聞きましょう」

！
」

ミリーの一声で、列になっていた生徒たちが我先に“風景画”の元に集まってきた。

青と白と黒を複雑にからみあわせた夜空に黄色い星が見え隠れした、ちよつと変わったタツチの絵。

「ち、ちよつと待てよ。この絵より、あつちに展示してある“神秘の降誕”！ ほら、せっかく聖堂美術館に来たんだから、あれをまづ見なきゃ駄目だろっ」

何をおいても、ここの展示物のメインはやっぱり、“神秘の降誕”じゃないのか？

こいつら一体、どうなってんだ。確かにこの絵は俺も好きだが、説明なんてよく知らないぞ。

「いいのよ。あの絵はレイチエルが見てくれるから」

ミリーは意味深な笑みを浮べると、“神秘の降誕”を見学する人垣の後ろに立って、彼らたちの方を見ていた、ブルネットの女教師を指差した。

レイチエル - 美人で長身のセクシー女教師 -

けれども、何かが腑に落ちない。何処かが怪しい……すると、彼女は、そんな青年の心を見透かしたかのように、にこやかな視線をこちらに向けてきた。ミルドレッドといえば、ポケットから携帯電話を取り出して、指先を動かしている。

こんな場所でメール？……本当に不真面目な奴。美術鑑賞だつて、一応は授業だろ。

だが、キースが眉をしかめた瞬間に

ジリリリリリッ！！

警報が鳴った。

そのとたん、聖堂美術館の明かりという明かりが、すべて消えてしまったのだ。

「何だ、何が起こったっ！？」

「皆さん、落ち着いて！ 大丈夫です。その位置を動かないで！ 明かりはすぐにつきますから」

警備員たちの大きな声が、広い館内にこだまする。慌しく彼らの靴音が響き渡り、すぐに懐中電灯を手にした数名が、あせった様子で“神秘の降誕”ブースに駆けていった。
ざわざわと不安げな人々の囁き。

停電？ でも、何で警報が鳴ったんだ。

“絵”……もしかしたら、“神秘の降誕”を狙って？！

そういえば、こここのところ、頻繁に新聞誌上を賑わしている不穏な事件の数々。

まさか……な。

キースの脳裏に、そんな事が浮かんだ時、ぱっと館内の照明が点灯した。

ときどきした気分で、絵の展示スペースに目をやる。

「大丈夫だ！ 絵は無事です」

思わずあげた警備員の声に、客たちは一斉に“神秘の降誕”に目を向け、ほっと息をついた。

なあんだ。無事だったのか

ちよつと期待をはずされて、キースは苦い笑いを浮かべた。絵画泥棒の現場に居合わせたなんて話が本当なら、絵描き仲間の中ではかなりの自慢になるのにな。ほっとしたけど、がっかりもした。そんな微妙な気持ちで、“神秘の降誕”が展示してある宗教画のブラスに目をやった時、

何だ……あの男？

キースは、別の宗教画の前に佇む、黒ずくめの若い男の姿に眉をひそめた。

バイク用の黒いレザージャケットにブーツ。髪が亜麻色でなかったら闇の中に溶け込んでしまいそうな……絵を鑑賞しに来たにしては随分、不釣り合いな格好。それに、その男の周りの空気だけがやけに重い。

……が、その時、

「さあ、電気もついたし、みんな、もう帰りましょ」

いつの間にか絵画ガイドを差し置き、生徒たちを先導しはじめたミリーが声をあげた。

「ち、ちよつと待て。まだ、ほとんど“絵”らしい“絵”は見えてないだろ？」

「いいのよ。もう飽きちゃった」

「おいっ！」

自分だけを残して、とつと館を出てゆく生徒の一団。あせって、

女教師レイチエルの方を見てみると……彼女も涼しい顔で彼らの後をついてゆく。

鑑賞ガイドって……そりゃあ、こんなんで250ポンドもらえるなら、ぼろいアルバイトだけど……

こいつら……うさん臭すぎるぞ！

キースは、はあ……とため息をついて、先ほどまでミリーたちが見ていた“無名画家の風景画”に目をやった。
その瞬間、

何いイイ！！

あまりの衝撃で心臓が口から飛び出しそうな気分になった。

「俺の絵！-！」

“無名画家の風景画”はそこにはなかった。その位置にあったのは、彼の露店でミリーが250ポンドで買っていた、

“キースの風景画”だったのだ。

* *

「な、何で俺の絵がこんな所に！？」

まさに晴天の霹靂。キースは、ときどきと辺りを見渡した。

“神秘の降誕”の方に気をとられて、ま、まだ、誰も気づいてないみたいだ。

警備員がやってくる前に、早く出て行かないと、これは、かなりヤバイ……。

あまり急ぎすぎても、不自然かもしれない。そろりそろりと忍び足で展示ホールを後にする。こんな状況の中に、自分の大事な作品を置いてゆくのは忍びなかった。けれども、

ごめん。俺の絵！

出口あたりで、キースは、もう一度、自分の風景画に目をやり、それから脱兎のごとく駆け出した。

* * *

翌朝、大聖堂に近いカフェテラスで、広げた新聞にすっぽり顔を隠しながら、キースはコーヒーをすすっていた。ミリーが彼に支払った250ポンドは女教師に返してしまったし、バイト料ももらえぬままに帰ってきて、結局、財布の中身は寒いままだ。

とんでもない、誕生日。そう、今日は俺の17回目の誕生日。でも、もうそんな事はどうでもよくなってしまっていた。今日のタブロイド紙の地方版の一面は、数日前のロンドンの殺人事件なんかじやなくて……

「聖堂美術館ですりかえられた謎の風景画。作者は誰……」

声を殺して、そばに座っているパトラッシュに新聞の内容を読み上げる。

「昨日、聖堂美術館で盗まれたとみられる複製画の後に残されていた、作者不詳の風景画に注目が集まっている。捜査本部は、“何故犯人が、複製画を狙ったのか”という疑問とともに、この残された

風景画が事件解決の重要な鍵を握っているとの認識を深め……ああ、本当にこれは、マジにヤバイ」

あの絵の作者って……一番の容疑者は俺か？

「どうしよう、どうしたらいいんだ？ パトラッシュ」

犬に相談したって面倒みってくれるわけでもないが、とりあえず、そう言ってみた。だって、このままだと本当にフランダースの犬みたく、悲劇の最後を迎えてしまいそうだ。

すると、その時

くわんっ！

と、パトラッシュが一声ないで、キースの膝元を口で噛んで引く張った。

「え？」

くわんっ！

何だ？ 俺と一緒に来いって言うてるのか

キースがその言葉を声にする前に、パトラッシュはもう走り出していた。

「ちょ、ちょっと、待てよ！」

駆けてゆく一匹と一人。その行き先は……

ピーターバロ・シティ・アカデミア。

“ 僕は見つけたんだよ。

すべての謎はそこにある！”

と、パトラッシュが言ったかどうかは、定かではないが、それでも、この１７歳の誕生日に、キース・Ｌ・ヴァンベルトの

運命の輪は、確実に違う方向に回りだしていたのだった。

* *

「パトラッシュ、ここって、あの学校の裏じゃないか？」

延々と続く赤レンガの壁。裏手といっても、ピーターバロ・シテイ・アカデミアの建物は豪華の一言につきる。だが、キースは鼻先に感じたかすかな香りに、おや？ と顔をしかめた。

油絵具の臭い？

彼にとっては、おなじみの香りが壁の向こうから流れてくる。その時、横にいたパトラッシュが、前足でレンガ壁をぼかんと殴ったのだ。（少なくともキースにはそう思えた）

すると、あるうことが、壁の一部がいとも簡単に崩れ落ちたではないか。

「おいっ！ 壁を壊すなよっ」

そう言ってみたものの、キースは、まじまじと目の前に都合よく出来上がった“出入り口……のような穴”を見つめた。

この豪華な建物の壁が犬のパンチごときで壊れるわけがないじゃないか。

この建物、あの先生、そしてクソ生意気な生徒たち。何もかもが怪しすぎるぞ……畜生！ おまけに、わざとらしく作られたこの穴は、何なんだよ。

パトラッシュのくるくるした瞳が、キースに語りかけてくる。

“行こう！ 真実を見つけたら、きっと何かが変わるから”

* *

見えない系にひかれるように、キースとパトラッシュはレンガ壁の穴を通り、学校の敷地内へと入り込んでいった。入ってすぐの場所に、これがまた、下りてください。とばかりに備えられた“地下への階段”が見えてきた。

「行くよ、行きやあいんだろうが」

半ばやけくそになって、キースはパトラッシュを伴い、その階段を下りていった。

地下室……？

先ほど嗅いだ、油絵具の香りが漂ってくる。そして、その部屋の扉を開いた時、

「この部屋！ ……一体、何なんだよ！？」

部屋の中の壁という壁……どちらを見ても、絵、絵、絵！

相当な広さがあるにもかかわらず、地下室の部屋の壁にはおびただしい数の絵画が掛けられている。

おずおずと部屋に入ると、キースは壁に掛かった絵に目をやった。「ピカソのサインがある……こっちは、ゴッホ？ でも、これは…

…」

また、つんと鼻についてきた油絵具の香り。

その瞬間、キースははっと、目を見開き、部屋中に掛けられた絵をぐるりと見渡した。ところ狭しと壁に貼られた肖像画たちの瞳が、

視線を返すように物珍しげに若い侵入者を見下ろしている。

「古い絵から、こんなに油絵具の香りがするものか……。という事は、

「贋作！ この絵、全部、二セモノか！？」

驚きすぎて、もう、言葉が出てこない。その時、

「失礼ね。ちゃんと本物も混じっているわよ」

部屋の扉の向こうから、聞き覚えのある、アルトな声が響いてきた。

女教師、レイチエル。

丰满なボディにぴったリフィットしたスーツに身をつつみ、髪と同じの褐色の瞳が、眼鏡の向こうで意味深に微笑んでいる。

「ピーターバロ・シティ・アカデミアにようこそ。ミリーの気まぐれのおかげで、あなたに会えて本当に良かったわ」

「会えて良かった？ あんたの台詞の意味がさっぱりわかんないよ。俺はただの売れない絵描きだぞ」

すると、女教師はにこやかに答えた。

「ミリーが、聖堂美術館で、すり替えたあなたの風景画、えらく評判になっているわよ。名うての画商が、どうしても手に入れたいと続々と手をあげている。目下の時価は2万ポンド」

「え？ 2万……」 *注 2万ポンドは約3百万円

「もちろん、闇での取引だけど。だって、もうプレミア付きだもの。反響の大きさに警察が犯人逮捕の手がかりになるって、あなたの絵、あのまま聖堂美術館に展示される事になったのよ」

そう言って、レイチエルはタブロイド版の新聞をキースに差し出

した。

“ 評判の謎の風景画、聖堂美術館に展示を続行！”

作者は天才？ はたまた、美術窃盗団か！

「……で、物は相談だけど」

驚いて二の句がつけないキースに、女教師は有無を言わず提案する。

「あなた、ここで絵を描かない？ 超豪華なアトリエを用意するわ。契約しましょう。ピーターバロ・シティ・アカデミアの専属画家として」

何だか頭の中が真っ白になってしまった。

俺の絵が2万ポンド？ 聖堂美術館に展示？ …… おまけに専属

画家？

その時、

くわんつ。

パトラッシュが一声、鳴いた。

すると、飛び出してしまったキースの心が、やっと体の中にもどってきた。ふうと息を吐き出してみる。騙されるもんか、こいつらロクな奴らじゃない。

「契約とかより、聖堂美術館の絵を盗んだのはお前たちだな。まず、その事を説明しろよ。何故、“神秘の降誕”を狙わずに“複製画”を盗んだ？ それに、俺の絵とすり替えたのはどういう理由だ？！」

キースの追求にも、レイチェルは、淡々とした態度を崩さない。

「絵のすり替えは、単なるミリーの気まぐれだつて言つたでしょ。それにね、あれは“複製画”なんかじゃない。れっきとした有名画家が描いた本物の絵よ。本当の価値もわからない馬鹿な収集家たちが、バブルの泡に乗せられて買いあさつた数々の美術品、その中に混ざり込んでいた逸品。“神秘の降誕”なんかより、ずっと優れた作品なのよ」

「……」

言葉が出せない青年にたたみかけるように、女教師は言う。

「私たちの目的は、そんな隠れた作品を探し出して、本当の価値でこの世に送り出す事。もちろん、あなたのような埋もれてしまつてゐる才能を見出す事もその一つよ」

「……なら、きちんと競売にでも出て、買い取つてしまえばいいじゃないか！ 盗む必要なんかないだろ？！」

ほほ……とレイチエルは挑戦的な笑みを浮かべた。

「そんなの、ちつとも儲からないじゃない。ここのご子息、ご令嬢の親にも、かなり有名な画商が沢山いるの。欲しい物には手段を選ばない収集家もね、ただし、彼らの目は本物。ミリーなんかその一人。あの審美眼には驚いたわ。あなたの才能をちゃんと見極めたんだから」

何だよ、それ？！ うまい事言つてても、結局は金が欲しくて絵を盗んでる窃盗グループじゃないかよ。おまけに生徒たちまで巻き込んでの俗悪集団じゃないか。

「契約なんかお断りだ！ どうせ、あそこに掛けてある贋作作りを手伝わせようつて腹なんだろ。誰がそんな犯罪の片棒を担ぐもんか！」

怒りにまかせて、そうは言つたものの、相手は犯罪集団だ。キースはかなり不安になつてきてしまつた。

俺、ちゃんと家に帰れるのか。簀巻きにされて、テムズ川に放り込まれちまうんじゃないのか……。

ところが、

「それは、残念。うちと契約すれば、十分な契約金と豪華なアトリ工、欧州の美術界への強いコネクション、それに……」

セクシー女教師は、意味深な笑みを浮かべながら若手画家に近づき、その完璧ボディを見せつけながら彼の耳元に囁く。

「女の子だって、選り好みだっていうのに」

キースは、ちらりと彼女の胸元を見てから、とことん気色悪そうな顔をする。すると、レイチェルはむっと眉尻をあげて、

「お帰りなんだったら、きちんと正門から出て！ 穴のあいた裏門から、小汚い男が出てゆくんなんて、それこそ警察に怪しまれかねないんだから」

訝しげに部屋を出てゆくキースとパトラッシュ。その背中越しに聞こえてきた女教師の声。

「言っておきますけどね。あの風景画の窃盗に関しては、あなたはもう第一の容疑者なのよ。今の話を誰にしたって疑われるのはあなたなの」

この女、超ムカつく！

キースは、その気持ちをたたきつけるように、力まかせに部屋のドアをボタンと閉めた。

「気がかわつたら何時でも、どうぞ」

ドアの向こうから響いてくる高らかな笑い声。畜生！ 馬鹿にしゃがって。それでも、今の自分に何ができる？

なす術のない悔しさに、キースはわざと靴音を大きくたてながら、

地下室から正面玄関へと続く階段を駆け上がっていった。

くわん、くわんっ！

ちよつと待てよと言いたげに、パトラッシュが、その後を追う。

足元からまっつてくるふわふわした毛並みを振り切り、キースがホールから正面玄関に出ようとした時、

「あつ、パトラッシュ！ 鑑賞ガイドもいる」

見たことのある生徒の集団が、彼らを見つけてわらわらと集まってきた。その先頭にいるのは、キースの風景画を250ポンドで買った……

ミルドレッド……通称ミリー。

「お兄さん、レイチエルに会った？ シティ・アカデミアと契約した？」

小悪魔的だけど、超絶に可愛い笑みを浮かべて近づいてくる少女に、キースは、あからさまに嫌な表情を浮かべた。そして、

「そんなもん知るか！」

「……」

一瞬の沈黙。けれども、ミリーは、

「やっぱりね……」

うるうると潤んだ目をキースに向ける。今までとはうって変わった、清纯派っぽく迫ってくる少女の雰囲気、若手画家はちよつとたじろいってしまった。

「な、何だよ。急に態度を変えんなよ……えっと……俺、お前に悪いことでもした？」

焦って、その顔をそつと覗き込む。

「ねえ、そんな顔されると、俺が困るんだよ」

戸惑ったような琥珀色の瞳に見つめられて、少女は、思わず、後

ずさってしまった。その距離、2メートル弱。高まった心臓の鼓動を彼に聞かれてしまいそうだったからだ。

……が、次の瞬間、

「お願い、この学院に来て！　どうしてもお兄さんの助けが必要なの」

突然、まくしたててきたミルドレッドの台詞に、キースは、何がどうなっているのか、さっぱりわからない。その時、別の生徒が、言葉を挟んできた。

「日の目を見ない作品や作家を世の中に出す。それには、僕らも賛成なんだ。けれども、レイチエルたちみたいに、金儲けのために作品を集めるのは嫌だ。そんな作品に、僕らの親たちまでが、目の色を変えて飛びついていくっていうのにも、もう、うんざりなんだ。

僕らは、この学園を変えたい！　あのレイチエルを追い出して、僕たちだけのピータバロ・シティ・アカデミアを作り直したいんだよ」それに付け加えて、ミリーも言った。

「けど、その目的のためにはお金がいっぱいいるのよ。私たちはレイチエルたちや親とは違ったルートでお金をためたい。そして、いつかは聖堂美術館を貸しきって収集した作品を、みんなに見せてあげたい。わかるでしょ？　お兄さんの絵はいいわよ。これからもっと価値が上がるわ」

おい、おい。結局はそこだよ。

キースはちょっと複雑な顔をした。自分の絵を褒めてくれるのは嬉しいが、資金集めのために、俺に絵を描けっていうのか？

すると、彼の心を読み取ったように、ミリーが、
「誤解しないで。お金のただけに、こんな話をしているわけじゃないの。私、大聖堂通りの露店の絵って、すごく好き。あの中にだ

つて世に出せば認められる作品は沢山ある。けれども、レイチエルや画商たちの集めたがつてる絵は、埋もれているといったって、すでに価値が認められている絵だけなんだもの。私ね、いつも遠くから、お兄さんたちを眺めていたの。大聖堂通りの画家たちは皆、活気があつて賑やかで……あの人たちなら、何か力になつてくれるんじゃないかと。だつて、私たちはしょせん、子供だもの。誰か大人の手をかりないと絶対、レイチエルたちにはかなわない。ピータバロ・シティ・アカデミアを変えたいの、だから、ここに来て！ 私たちに力を貸して」

こいつつて12歳くらいだろ？ 小学生にしては、えらく小賢しい事を言つと、キースは、真剣な眼差しの少女を呆れたように見た。そつえば、ここの学校つて学力の方でも相当に高いんだつて。

でも、私たちは、しょせん子供つて言われても……俺だつて、今日、17歳になつたばかりなんだぞ。そりゃ、露店の仲間たちはあれでけつこつ頼りになるけど。

それでも……、

「そんな話、簡単に“うん”とは言えない。とにかく、俺は家に帰りたいんだ！」

キースは冷たくそう言つて、くるりと踵を返した。

ミリーや他の生徒たちの視線が、背中に痛い。生意気なだけかと思つていたシティ・アカデミアの生徒たちの直向な姿に、このまま帰つてしまうのは、後ろめたいような気分がする。けれども、

「パトラッシュ、俺には関係ない事だよな」

キースはパトラッシュに念を押すようにそう言つと、足早に歩を進め、ピータバロ・シティ・アカデミアの正門を後にするのだつた。

* * *

翌日、キースは聖堂美術館に展示された自分の絵の前に立っていた。

画家を目指して田舎から出てきた俺が、このピータバロの町に着いた時に最初に描いた、自分でもお気に入り風景画。

何か変な感じだ。だって、俺の夢はいつか聖堂美術館に自分の絵が飾られて、みんなに認めてもらう事だった……それなのに、夢が実現した今は、それがちつとも嬉しくない。

実際のところ、俺の夢って何だったんだ？ 金が欲しかったのか、名声か？

わからない……俺は自分で自分の気持ちだが、さっぱりわからなくなってしまった。

その時だった。

「おい、キース、この風景画、絵画窃盗犯が描いた絵だって、えらい騒ぎになってるじゃないか」

背後から急にかけられた声に、びくんと身をちぢ込ませる。振り返ってみると、見知った大聖堂通りの露店の仲間の一人が、気がかりな顔で立っていた。

「……でも、この絵って、お前が描いた絵だよな。なあ、一体、何があったんだ？」

「しっ……」

キースは慌てて男を黙らせると、まじまじとその顔を眺めた。髪はぼさぼさの髭面で、上着は油絵具まみれ。疲れたような顔つきなのに眼力だけはしっかりしていて、若いのか年とってるのか、ちつとも分からない。けれども、気を使う必要もないし、そばにいてくれると妙に頼りになるというか……そう、あの聖堂美術館通りの露

店主たちって、そういう奴らばかりなんだ。すると、にわかには
イ・アカデミアで聞いたミリーの言葉が頭に浮かんできた。

“……遠くからいつも見ていたの。あの人たちなら、何か力になっ
てくれるんじゃないかと。ピータバロ・シティ・アカデミアを変
えたいの、だから、ここに来て！ 私たちに力を貸して”

俺がやりたかった事、これからやれる事……それって

地位？ 名声？ ……うつん、そうじゃなくて……。

はっと目を見開くと、突然、キースは身をひるがえし、男に言っ
た。

「今は何も聞かないで。でも、後で理由を話したら、俺についてき
てくれるか？ 納得がいたらでいいんだ！ 無理にとは言わない
から」

「え……そりゃ、仲間の頼みなら……でも、一体、何なんだ？」

男がその台詞を言う前に、もうキースは駆け出していた。

「パトラッシュ、急げ！」

くわん、くわんつと鳴きながら、帆走する相棒に声をはずませて
言う。

迷いが、霧が晴れるように消えてゆく。

絵の価値もわからない収集家に褒められて、自分の絵が売れたっ
て嬉しいはずがないじゃないか！ 俺は高値で売るために絵を描き
たいんじゃない。絵が好きだ、本当に好きだから、そんな気持ちを
みんなに伝えたかっただけなんだ。

ピーターバロ・シティ・アカデミアを変えるんだ！ そして、い

つかは聖堂美術館を貸しきって、日の目をみない作品やうずもれた才能を、みんなに見せてあげたい。

息を弾ませ駆けながら、キースは少し人の悪い笑みを浮べた。

でも、ミリーたちはやつぱり子供だ。俺の絵だけで、そんな資金が作れるものか。あの小ずるいレイチエルに対抗するには、きれい事ばかりを言ってはられない。

「お前もついてきてくれるよな。しばらくは、泥泥した世界に足を突っ込んで、夢や理想なんて甘い言葉は言ってられないかもしれないけど、俺は大丈夫だから……」

豪勢な作りのピータバロ・シティ・アカデミアの校門の前で、キースはパトラッシュの頭をくしゃくしゃとなぜた。

それでも、いつかは、夢を現実にする。今はまだ、できないけど……でも、その分は

“好きなだけ描けばいいんだから。自分のキャンパスの中に”

* *

「門を開けますから、少しお待ちになつて下さい」

キースが、名前を告げると、シティ・アカデミアの門番はレイチエルから彼の名前を聞いていたらしく、すぐに事務所から外に出てきた。

「この門を入ったら、もう、後戻りはできないんだろな」

脳裏に貧乏でも楽しかった露店での生活が浮かんでは消えてゆく。すると、不意のあの小生意気なミルドレッドの顔が、その映像の中に紛れ込んできた。

「おいおい、何であの子が出てくるんだよ……」

キースはちよつと焦ってしまった。泣かせてしまったことへの罪悪感もあった。それを誤魔化すために、そばにいたパトラッシュを撫ぜようと、彼の毛並みに手を伸ばした時、

後ろの通りを、黒塗りのバイクが通り過ぎていったのだ。

「えっ」

キースは、そのライダーの姿に一瞬、氣をとられた。

黒いレザージャケット……？

まさか、あれって、王宮美術館で見た黒ずくめの男？

けれども、豪勢な造りの門が、彼と相棒のパトラッシュのために開かれた時、その姿は彼の記憶の片隅へと押しやられてしまった。

門の向こうに聳え立つ超豪華な名門校の建物。

ふうと一つ息を吐く。それから、キースは、彼の足元にぴたりと寄り添った中型犬に言った。

「行こう！ 真実を見つけたら、きっと何かが変わるから」

そして、これが後に、若い芸術家の育成に力を注ぎ、欧州美術界を手広く牛耳ることになるピータパロ・シテイ・アカデミア総帥の優秀な片腕となり、画家にして聖堂美術館館長となる男、“キース・ヴァンベルト”が正式にこの学院の門を通り抜けた第一歩だったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1868e/>

ピータバロ

2011年8月16日00時29分発行